

二〇二五年度・学力考査問題【国語】

(中学帰国生)

注意

- 一、試験時間は2科目合わせて80分です。
 - 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
 - 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
 - 四、問題は14ページで□・□・□・□の四題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
 - 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。
- また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

線①②のひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 大型船が横浜①にきこうする。
- 2 ちんぎんの引き上げを要求する。
- 3 そう②ていして③いた答④えと異なる。
- 4 未知⑤のりよういき⑥へと乗り出す。
- 5 システムがさっしん⑦される。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私」(マユ)は二年ほど前に離婚した「ママ」と二人で団地で生活している。以前は母方の祖母である「バーバ」(ハナちゃん)も一緒に生活していたものの、最近では記憶がいまいになり、「私」と「ママ」が分からなくなり始めたので、「ママ」は必死に面倒を見ている。しかし、数週間前に介護の負担からとうとう老人ホームに入所することになった。

「私」は、※1認知症による退行を理由に「私」の大好きな「バーバ」を「はなちゃん」と呼ぶ「ママ」に反感を感じる一方で、「バーバ」がホームに入ってからほとんど何も食べなくなっていることを心配している。

今日から、夏休みが始まった。カーテンの向こうに、青空が透けて見える。やっと長い梅雨つゆが明けた。開け放った窓から、そよ風が入ってきて、まるでカーテンが呼吸こそをしているみたいに、膨らんだり凹へこんだりする。ママは、簡易かんいソファの上に横よこになった。そんなママを労るいたように、またそよ風が吹ふいてきて、ママの額かぶを優しく撫なでている。

「お母さん、ちょっと休むから、マユ、はなちゃんのそばにいてあげてね」

ママは言った。

私は、バーバにそっと近づかづく。そして、バーバの周りに漂たう空気を、

思いつき肺に流し込んだ。

果物が腐る寸前のような、熟した甘い匂い。バーバに近づくと、林檎と梨と桃を混ぜたような匂いがする。そして、この匂いを嗅ぐたびに、私は生まれて初めてチーズを食べた時のことを思い出してしまう。あれは、パパの誕生日だったのか。それともパパとママの結婚記念日だったのか。その日両親はワインを飲んでいた。そして、テーブルには何種類かのチーズが並んでいた。

マユも食べてみるか。パパに差し出された一切れを口に含んだ私は、うえつとすぐに吐き出した。パパ、まずいよ、これ。マユはまだ子供なんだなあ、パパは顔をしかめる私をうれしそうに眺めていた。だって、腐ってるじゃん。私は抗議するように言った。腐っているんじゃないよ、醸しているんだよ。パパは、私が吐き出したのと同じチーズを幸せそうに口に放り、それから足の長いグラスを掲げて真つ赤なワインを飲み干した。そして言ったのだ。腐敗することと発酵することは、似ているけど違うんだよ。どう違うのかは、パパも上手に説明できなけれど。

その時、ママがどういう顔をしていたのか、思い出せない。私は、ちぐはぐな両親の蝶番となるべく、幼い子役を演じるのに必死だった。だから、もし今パパがそばにいるのなら、真つ先に尋ねたい。バーバは腐敗しているのか、それとも発酵しているのか。

私は、お人形遊びをするように、バーバの白い髪の毛をもてあそぶ。バーバの髪の毛をいじることを、ママはあまり良しとしない。でも私は、そうされている時のバーバはとても気持ちよさそうだと感じている。今日は、髪の毛を左右二つに分けて、三つ編みに結んでみる。本

当に、柔らかくしてお人形みたいだ。私が持っているカラーゴムで、左右の端を結んであげた。そして、私は耳元で囁く。

「バーバ、おなかすかない？ 私のキャラメル、食べる？」

ママの言い方が移って、幼い子供に話しかけるような口調になった。私は、箱からキャラメルを一つ取り出し、紙を剥いてバーバの口元に持っていこうとする。と、その時、バーバの口元がふわりと緩んで、かすかに「ふ」という音がした。

「ふ？ ふって何？ このキャラメルは、熱くないから、ふーふーはしなくていいんだよ」

バーバが何かに反応したことに慌ててしまい、早口になった。けれど、いざ私がキャラメルをバーバの口に入れようとすると、バーバはまたきゅつとくちびるを閉ざしてしまう。

「はい、あーん」

ママと同じ、甘つたるい声になった。すると今度は、バーバの右手がすーつと伸びて、窓の向こうを指差す。普段は直射日光が眩しいので、薄い方のカーテンは閉めたまままだ。

「お外、見たいの？」

しつかりとバーバの目を見て尋ねると、バーバはまた、「ふ」という音を漏らした。

じゃあ、ちよつとだけだよ、そう言っつて、私はバーバの寝ているベッドを離れ、窓辺に移動する。それから、カーテンを開けた。その時、「バーバ、もしかして、ふつて富士山の、ふ？」

ふとひらめいたのだ。その瞬間、バーバの薄曇りのような色の奥まった瞳が、ピカッと輝いたように見えた。

あまりにも当たり前前に存在するので見慣れてしまい、忘れそうになつていくけど、私達が暮らしている町からは、富士山がよく見える。昨日まで大雨が降っていたから、空気がいつもより澄んでいるのかもしれない。富士山は、ホームの窓から見える景色の中で、しっかりと輪郭を現わしている。

「これでいい？ バーバ、富士山が見たかったんだね」

カーテンを開けたせいで、ますます心地よい風が流れ込んでくる。ママは、すっかり眠っているらしい。けれど、まだバーバは、「ふ、ふ」とかすかな息を出す。マユならわかってくれるでしょ、と訴えかけるような表情で。

「見えない？ ほら、よく目をこらすと、向こうに、富士山、見えるでしょ」

バーバは口元をほころばせ、くちびるをパクパクと動かしている。

「ん？ おなか空いた？ やっぱりキャラメル食べてみる？」

そう言いかけた時、何かを思い出しそうになった。バーバのこの表情を、いつかどこかで見たことがある気がしたのだ。いつだっけ？

バーバの、はにかむような柔らかい表情。

あつ、そうだ。何年か前に家族みんなで、かき氷を食べに行ったのだ。並んで並んで、やつと噂のかき氷にありつけた時、バーバは、言ったのだ。ほーら、マユちゃん、富士山みたいでしょう、つて。あ、そうか、そういうことか！！

「バーバ、わかった、少し待ってて。マユ、かき氷買ってきてあげるからー」

気がつくくと、大声で叫んでいた。私が騒々しく部屋を出て行こうと

した時、ママが目を覚ました。

「マユ、どこ行くの？」

眠そうな気だるい声で尋ねるので、

「バーバ、富士山が食べたんだよ、絶対にそうだよ、だから今」

そう言いかけると、

「富士山？」

ママは、不思議そうに本物の富士山の方を見つめる。

「だから、何年か前、みんながかき氷を食べに行ったじゃない。あれだよ、あそこのなら、バーバ、食べられるんだって」

「だって、あの店は」

「わかってるー！ でも、行くしかないでしょっ！」

じれったくなり、つい乱暴な声を出してしまふ。けれど、そうしている間にも、バーバの体に変化していくようで怖かったのだ。私は、ホームに置いてあるクーラーボックスを肩に担ぎ、猛然と部屋を飛び出した。廊下を走りながら、バーバが受け付けなかったキャラメルを、口の中に放り込む。

駐輪場に停めてあつた自転車にまたがり、かき氷店を目指した。大雑把に言うくと、そこは、かつて家族三人で暮らしていた町の方角にある。道なら覚えていた。ただ、パパの車で通った時の記憶だから、交通量の多い幹線道路を走らなくてはいけなけれど。

夏休みで連休のせいとか、車がかなり渋滞している。私は、Aに歩道と車道を交互に走った。ぐんぐんと富士山が迫ってくる。急がなきゃ、急がなきゃ、気がつくくと、猛スピードで走っていた。体が、風の一部になつてしまふそうだった。

何かアクシデントが起きてでも不思議じゃなかったけど、何も起きずにかき氷の店まで辿り着く。でも、やっぱりここも、ものすごい人だかりだ。店の前に、長い行列ができています。どうしたら良いのだろう。このまま待つていたら、夜になってしまいかもしれない。私は、一心に店の奥へと突き進んだ。

この店では、天然氷というのを使っている。冬、プールのような所に水をためて自然の力で凍らせ、それを切り出して保管し、かき氷にするのだ。私は今でも普通の氷との違いがよくわからないけれど、パバはその氷の味をえらく褒めていた。この氷でウイスキーの水割りを作ったら、うまいだろうなあ、とか何とか言っている。でも、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。一秒でも早くバーバにかき氷を届けなければ……。

店の庭では、みんなうれしそうにかき氷を頬張っている。あの時も向日葵が満開だった。確かに数年前、私達はこのままいつまでも同じメンバーでいることに、何の疑いももたず、ここでかき氷を口に含んだのだ。

「すみません」

勇気を振り絞り、窓の所で四角い氷を機械で削っているおじさんに声をかけた。でも、周りが騒がしくて聞こえなかったのか、無視されてしまう。

「すみません！」

二度目は、声を強くした。ようやくおじさんが、できたての氷の山に透명한シロップをかけながら私の方を見てくれる。けれど、その先の言葉が繋がらない。私はみるみる泣きたくなった。ただ、バーバに

かき氷を食べさせただけなのに。どうしてこんなに悲しくなってしまうのだろう。けれど、早く言え、と何かが私の背中を強い力で前に押ししてくれたのだ。

「バーバが、いえ祖母が、もうすぐ死にそうなんです。それで最後に、このかき氷を食べたいって」

ぐっとくちびるを噛みしめ、涙の落下を食い止める。一瞬、音という音が世界から消えた。どうしてそんなことを口走ったのか、自分でもよくわからなかった。ママとの会話でも、ずっと気をつけて避けて通ってきた、一文字の単語。それが口をつけて出たことに、自分でも驚いてしまう。

「ちょっと待ってて」

子供の言葉など相手にしてくれないかと懸念していたのに、おじさんはぶつきらぼうにそう言うのと、またくるくると機械のレバーを回し始めた。目の前のカップに、白い氷の山ができていく。私は、ポケットから小銭を取り出した。かき氷一杯は買える。おじさんは、氷の小山の上から、透명한シロップをうやうやしくかけた。それを、クーラーボックスの中に入れてくれる。

「ありがとうございます！」

お金を払い、深々と頭を下げて、その場を立ち去った。

帰り道は、ますますスピードを上げて自転車走らせる。クーラーボックスの中の小さな富士山が溶け出す前に、どうしてもバーバに届けなくてはならない。

「ただいま。バーバ、富士山、持ってきたよ」

ホームに戻ると、またカーテンが閉じられていて、部屋全体が暗色

に見える。クーラーボックスから、急いでかき氷を取り出した。もし全部溶けてしまっていたらと想像すると胸が潰れそうだったけれど、かき氷は、少し縮んだように見えるだけで、きちんと富士山の形を留めている。私は、ママにかき氷を手渡した。

「はーちゃん、あーん」

ママはそう言いながら、バーバの口元に木製のスプーンを差し出す。バーバのくちびるは、うっすらと開いている。けれど、スプーンが滑り込めるほどの隙間はない。

「マユが、一人で買いに行ってくれたんですよ」

ママの瞳から、つるんと一粒の涙が落ちる。やがてバーバは、何かを言いかけるように上下のくちびるを広げると、スプーンを受け入れた。

「おいしいでしょう？」

ママの声が湿っている。二度、三度と、バーバはスプーンの上のかき氷を吸い込んだ。そのたびに、目を閉じてうっとりとした表情を浮かべる。

私は確信する。バーバは今、数年前の夏の日、家族で行ったかき氷店のあの庭に帰っている。ごくり、と喉が鳴って、富士山の一部が、バーバの体の奥に染み込んでいく。私は窓辺に移動して、カーテンをかきわけ外を見た。富士山が、オレンジ色に光っている。すると、マユ、とママが呼ぶ。

振り向くと、ほら、バーバがマユにも食べさせたいって、と、私を手招いている。驚いたことに、バーバは自分で木のスプーンを持っている。

近づくと、私の口にかき氷を含ませてくれた。同じように、ママの口にもかき氷を含ませてくれる。ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた。

舌の上のかき氷は、まるで冷たい綿のようだ。さーっと溶けて、消えてなくなる。体のすみずみにまで、爽やかな風が吹き抜ける。

「眠くなってきちゃった」

そのままバーバのそばにいたら、泣いてしまいそうだったのだ。簡易ソファへ移動した。ママの前で泣くなんて、かつこ悪い。

「軽い熱中症かもしれないから、そこで少し休みなさい」

ママが、威厳たつぷりに命令する。バーバとママ、二人の世界を邪魔しないよう、横になってそつとまぶたを閉じる。

再び目を開けた時、部屋の中があまりに静かで、胸がどきゅんと真つ二つに折れそうになった。天井が、虹色に輝いている。もしかして……。私は起き上がって一歩ずつベッドに近づいた。バーバの隣に、目をつぶったママがいる。私は、バーバの鼻先に手のひらを翳した。よかった。バーバは、生きている。

くちびるの端が光っていたので、私はそこに自分の右手の人差指を当てた。そのまま口に含むと、甘い味がする。でも、さっきのかき氷のシロップの甘さじゃない。もつともつと、複雑に絡み合うような味だ。やつぱり、バーバは今この瞬間も、甘く発酵し続けているのだ。

(小川糸「あつあつを召し上がれ」新潮社所収「バーバのかき氷」より)

※1 認知症による退行：脳の働きが低下し、子どものような発言や行動をすること。

問三 —— 線2「猛然と部屋を飛び出した」とありますが、この時

の「私」の様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

問一 —— 線a「はにかむような」・b「うやうやしく」の本文に

おける意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a はにかむような

ア 何か言いたげな

イ 恥ずかしそうな

ウ 訴えかけるような

エ 子どものような

b うやうやしく

ア いかにももったいぶって

イ わざとらしく時間をかけて

ウ 礼儀正しく丁寧（ていねい）に

エ 周囲を意識し得意そうに

問二 —— 線1「ママと同じ、甘ったるい声」とありますが、その

説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相手を安心させる優しい声

イ 必要以上に愛情を込めた声

ウ 相手をからかうような声

エ 幼い子どもに話しかけるような声

問四 空欄 A には「その場や状況に適した行動をとる」という

意味の四字熟語が入ります。次の漢字の中から必要なものを選び、空欄にあてはまる四字熟語を完成させなさい。

公	光	応	火	横	自	尽	由
臨	無	在	縦	変	石	電	機

問五 —— 線3 「そんな感傷」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア バーバに食べさせたい天然水の味を、父の言葉をきっかけにしてはつきりと思い出している。

イ 両親やバーバと一緒に食べた、天然水のかき氷のおいしさが鮮やかによみがえっている。

ウ 家族がそろって過ごし、当時はずっと続くと信じていた時間懐かしく思い返している。

エ 評判の店のかき氷を家族で口にした時の長い行列を思い出し、購入に不安を感じている。

問六 —— 線4 「マユが、一人で買いに行ってくれたんですよ」とありますが、この時の「ママ」について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 遠くまで買いに出かけたマユに感謝するとともに、マユの思いが込められたかき氷を何とか母に食べてもらいたいと願っている。

イ かき氷を頑なに食べようとしない母に対し、実はマユが必死に買い求めたものであることを知らせることで、どうにか食べてもらおうとしている。

ウ このかき氷はマユの思いが込められたものであることを伝え、でも、そつけない態度でかき氷を口にしない母の様子に失望している。

エ もう口を開く力が残されていないが、何とかかき氷を食べようと努力する母に対して、子ども扱いせず大人として接しようとしている。

問七 —— 線5 「ママは明らかに戻っていた」とありますが、この時の「ママ」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア バーバによくやくかき氷を食べさせられたため、ママが子どものように喜びをあらわにしている。

イ かき氷のおいしさに驚いたママが、さらに食べさせてもらおうとバーバに子どものように甘えている。

ウ バーバのために困難を乗り越えて成長したマユには、かき氷を食べさせてもらうママが幼く見えている。

エ いつもはバーバを子ども扱いしているママが、幼かった頃のようにバーバに甘えている。

問八——線6「バーバは今、発酵し続けているのだ」とありま

すが、この表現について中学生たちが話し合っています。本文の内容をふまえたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

先生

辞書を引いて発酵と腐敗について整理していこう。どちらも微生物の働きによるものだけど、人間の役に立つものを発酵、それ以外を腐敗と呼んでいるみたいだね。

ア 生徒A——これは今まで何も食べられなかったバーバがようやくかき水を口にできたことで、これからは体力も戻って回復に向かうとマユが確信している場面なんじゃないかな。

イ 生徒B——長く生きてきたバーバと、マユとママたちは本質的に違う存在でお互いに分かり合えなかったけれど、マユの努力をきっかけに今後は良い関係が期待できそうな場面ね。

ウ 生徒C——バーバはマユが何より恐れている死に近づいていても、マユにとっては時に不安を感じさせられるものから温かい気持ちにしてくれる存在になりつつあるのさ。

エ 生徒D——いや、私はマユが目を開けた時に一瞬感じた動揺が、バーバがまだ生きていると知って、落ち着きを取り戻している状態に移り変わっていく様子を表しているんだと思うわ。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある日の「Twitter」で「自分の料理に対して『ズボラ・手抜き』と表現することをやめる宣言」をしたところ大きな反響がありました。レ

シピ本でも、「ズボラ・手抜き」はここ数年よく使われるキーワードで、実際に売れている本もたくさんあります。きつと本の著者が言いたいのは「最小限の手数でおいしいものを作ること」なのかなと思います。それを謙遜して「ズボラ・手抜き」と表現しているのでしょうか。作った本人が胸を張って「ズボラ・手抜き」と言えるなら私は何も思いません。大阪のおばちゃんが安く買った服を自慢するみたいに受け取ります。本人が嬉しく感じているならいいことだと受け取ります。でも今までのいろんな人に料理を教えてきて、「こんなに頑張った作っているのに、なぜ手抜きと言うの？」と思う場面が多々ありました。

自分なりに精一杯やったけれど、今日の体力・気力ではこれしか作れなかったとき、ズボラ・手抜きでごめんね、とつい口から出てしまう。それは謙遜のように見えて、実は少しずつ自分を傷つけていることになっていないかな、と心配になります。今日できる精一杯のことをやったのだから、「今日もなんとか頑張った！」で十分のはずです。

料理する人が自分の作っているものに対して自信が持たず、簡便な方法で料理することを「X」ではなく「手抜き」と思い込んでしまう。私は料理を教えながらそういう人が数多くいることを知っています。料理は自尊心とごく密接な関わりがあるので、考えるようになりませんでした。

自尊心とは、自分自身を価値ある存在だと感じる感覚で、自己肯定感^{かん}という言葉で表現されることもあります。私は心理学のプロではないのですが感覚として、自尊心がある状態とは次のようなことが挙げられると思います。勇気を出して何か新しいことにチャレンジする、失敗してもまた立ち上がれば大丈夫^{だいじょうぶ}と思える。かつこいいところとかっこわるいところ、それぞれある自分を「完璧^{かみへき}な人間はいないからこんなものだろう」とほどほどに受け入れられる心の持ちよう。「自分自身を価値ある存在だと思う」とまで言ってしまうと、なんだか自惚^ほれているように聞こえてしまうかもしれません、自分は生きていて大丈夫と思えることが「自尊心の高い状態」というのが私の理解です。

自尊心が料理の楽しさに直接影響^{えいぎょう}しているわけではないのですが、何か新しいことをやってみよう、失敗しても大丈夫と思えることは料理にも少なからず影響があると思います。

料理は楽しいと感じながら取り組むと、おいしいと感じやすく、心もお腹も満たされて幸せを感じやすい、と私自身の体験や、料理教室の参加者の変化から感じます。上手に作れるとまた作りたくなって、次に作るとさらに自分好みに作れるようになって……と螺旋階段³を上がるようにぐんぐん料理が楽しくなります。自分で作って食べる自炊^{じしゆ}であれば学校のテストのように誰かと比べられるわけでもないですし、自分のために時間を使うことで自分を労^{あは}っているような感じがして、自尊心の高まりに寄与^{よきよ}していると思います。

一方、何かが原因で料理することが嫌^{いや}になってしまうと、食事の時間がやってくるたびに料理から逃^にげているような感覚になったり、作

ろうとしても「どうせおいしくできないだろう……」と結果を先に想像して行動に移せなかつたりすることもあるのではないのでしょうか。そうするとさらに料理が嫌になり、間接的に自尊心が削^そがれていきがちです。料理はまるでリトマス試験紙のように、その時の自尊心を浮かび上がらせる行為^{こうゐ}。この本のテーマである「自分のために料理が得意^うくない」という状況^{じやうき}には、このことが大きく影響しているのではないかと、というのが私の仮説です。

自尊心について、もう少し詳しくみていきましょう。

自尊心には大きく分けて三つの軸^{じく}があると専門家が解説しています。

- ①自分が誰かの役に立っているか
- ②自分のやりたいことをできているか
- ③安心できる環境^{かんきやう}にいつもいられるか

これら三つのバランスによって自尊心は成り立っているようです。この三つのうち、①は誰かからの評価が必要ですが、②と③は自分だけでも実践^{じしせん}できそうなことです。そして、この二つは自ら料理を作ることによって満たされるものだと思えます。

心地よく料理することが自尊心のケアをしていると実感したエピソードがあります。とある飲み会で知り合った三〇代³⁰くらいの女性。彼女は料理が大好きで、その理由を聞いてみると、「仕事では部下の失敗や上司の意向など、私一人の意思ではどうにもならないことがたくさん起こる。でも、家に帰って作る料理は誰^{だれ}からも指図^{さしず}されず、自

分の思うままにやっつけていい。成果がすぐに現れて、ちゃんとおいしい。こんな楽しいことはない」と話してくれました。私はそれを受けて、感じてはいるけれど言葉になつていなかった料理の価値がくつきりと輪郭を持ったように感じられ、激しく同意しました。自らの望み通りにやりたい気持ちで満たされ、さらにはそれが安心感につながり、明日の自分の糧となる感覚も同時に得られている。料理で自尊心を育てると、ちよつと大変なことがあつても、嫌な思いをしても、まあ、私帰つたらおいしいご飯作れるし、ここは見逃しておこうと切り替えられることもあるから不思議です。これだけ変化が大きい時代において一定の自尊心を保っていることは、人生を生きやすくしてくれることにつながるはずですよ。

もし料理が苦手、やりたくないと思つていたとしてもこの料理と自尊心の関係性がわかれば、さほど気にせず「私はそういうタイプだから」と割り切れるかもしれません。私は誰に対しても料理した方がいいと思つているのではなく、苦手だから料理からさっぱり離れるという判断をする人がいても当然だと思つています。料理で自分のことを嫌いにはなつてほしくないですし、手料理が「親の愛情」や「女子力」のパロメーターとして使われる時代でもありません。料理と自尊心はこの本で大きなテーマになります。もしあなたが今、「自分のために料理するのがしんどい」と感じているならば、向き合うべきは料理の技術や知識ではなくご自身の自尊心かもしれません。そこに光を当てること、自分についてより理解が深まれば、自分のために料理をするのがしんどくなくなる可能性は十分にあると思います。ぜひその希望を胸に読み進めてみてください。

ここまで、料理についてこんがらがつてしまつてあることを一つずつ紐解いてみました。読む前より少しは料理の全体像がすつきりとした感じがあるでしょうか。私が書いたこと以外にも、人の数だけ料理が億劫になる理由があるはずですよ。

料理は栄養、経済状況、スキル、合理性、食欲などをバランスよく検討する必要がある複雑な行為です。そして料理をする人間側も口ポットではありませんから、料理に使える体力や気力、時間も毎日異なります。行為の複雑性と、実行する人間側の複雑性が重なるから料理は複雑になり、糸がこんがらがつてしまします。

料理は簡単に続けられることではないかもしれませんが、だからこそその面白さがあります。料理は毎日違う自分の体調や気分などに合わせて、その時の最適解を工夫して生み出していくことができます。体調や気分には波があり、いつも同じではないから工夫が必要です。しかし、今の自分にフィットした料理が作れた時、お金を払つても得られず、誰からももらうことのできない、自分で手をかけて自分に返ってくる喜びがあります。自然と自分を肯定することができ、やった！と感じることができ、この嬉しさは誰かから認められることを必要としません。自己完結型の幸せを、料理をするたびに作ることができ、日々料理して小さな嬉しさを繰り返して重ねていくことで、自分の中に「やったー」の経験が溜まっていき、いつか大きな生きる糧となることを願つて日々料理を教えています。

(山口祐加・星野概念「自分のために料理を作る」)

自炊からはじまる「ケア」の話 晶文社より

※1 Twitter…SNS(ソーシャル・ネットワーク・キング・サービス)

の一種。現在は「X(エックス)」という名称に変更へんこうされている。

※2 寄与…うけよ貢献すること。

※3 億劫…物事をするのに気が進まない。

問一——線1「自分の料理に〱宣言」をした」とありますが、

その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 料理に関する本を出版するときに「手抜き料理」という言葉はよく使われるが、ここ数年は多く使われすぎていて、独自性がなくなつたから。
- イ 自分で作る料理に満足できないことから「手抜き料理」と表現していたが、技術を身につけたことで満足できる料理を作れるようになったから。
- ウ 手軽でおいしい料理を表すために「手抜き料理」という言葉がよく使われるが、料理を作った人の努力を否定する言葉として使われることもあるから。
- エ 精一杯料理を作ったことを肯定するために「手抜き料理」という言葉が使われていたが、よりふさわしい表現を発見することができたから。

問二 空欄 X に入る言葉として最も適当なものを次の中から選

び、記号で答えなさい。

- ア 効率的
- イ 否定的
- ウ 利己的
- エ 意欲的

問三——線2「自尊心の高い状態」とありますが、その説明とし

て最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身を高い価値を持つている存在である、と感じることができ、物事に取り組むときも「自分は失敗しない」という確信がもてる状態。
- イ 自分はたかさんのことにチャレンジすることができ存在であると認識しているが、どこか自分の能力を実際よりも高く評価している状態。
- ウ 自分が失敗しても再びチャレンジすることができるのは他者の支えがあるからだ実感でき、その存在を大切に思える状態。
- エ 自分自身を完璧な存在ではないと思いつつ、そんな自分に適度に受け入れながら、失敗を怖れずに新しいことに挑戦できる状態。

問四 —— 線3 「螺旋階段」とありますが、このたとえばが表現している内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 料理は複雑なものではあるが、一つ一つ段階を着実に踏んでいくと、誰にでもおいしい料理を完成させることができる、ということ。

イ 料理をすることが楽しいと感じることができると、作った料理をよりおいしく感じることもでき、さらに上手く料理を作りたいと思うことができる、ということ。

ウ 失敗することを怖れずに料理に挑戦するとおいしい料理を作れるようになり、時間はかかってしまうが、料理の楽しさを理解することができる、ということ。

エ 毎日料理を作り続けることは体力的にも大変なことだが、その努力を続けることができれば料理をすることの楽しさに気づくことができる、ということ。

問五 —— 線4 「感じてはいる」料理の価値」とありますが、それはどのようなことですか。「どうにもならない」、「自尊心」という語を必ず使用して五十文字以内で説明しなさい。

問六 —— 線5 「自分のために」しんどくなくなる」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から探し、記号で答えなさい。

ア 知識や技術だけを大事にするのではなく、自分の自尊心を上手く高めることができれば、どんな人であっても、料理を楽しいと思うようになる、ということ。

イ 自分の中で自尊心がどのように高まっていくかを理解することで、料理を上手に作るための技術や知識を今まで以上に磨きたいと思うようになる、ということ。

ウ 自尊心を高めていくことが料理にとって最も重要であるということを理解すれば、料理をやりたくないと思うときがあっても、その辛さを乗り越えられる、ということ。

エ 料理をする苦労を取り除くための知識や技術にこだわるのではなく、自分自身を理解することで自尊心を高く保ち料理に対して前向きになれる、ということ。

問七 筆者は「料理をすること」についてどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 料理は食材だけではなく経済状況なども影響するようなものであるが、その複雑さと向き合いながらその日にふさわしい料理を作ることによって小さい喜びを得て、さらに誰かに食べてもらうことで他者からも肯定されるという大きな喜びを得ることが出来る。

イ 料理はあらゆる複雑な要素がからみ合っていて、あがって行くので、練習には多くの努力を要するが、その日にできる料理を作って、小さな成功体験を積み重ねていけば、いずれいつでも一定のおいしさを持つ料理を作ることが出来るようになる。

ウ 料理はそれ自体の複雑さと、日によって体力や気力が異なるという人間の複雑さからみ合って構成されているが、それゆえの面白さも含んでいて、その日の自分に適した料理を作って小さな満足感を積み重ねることで、自分だけの喜びを得られるようになる。

エ 料理は食材だけでなく、作る人の食欲や持っている技術も影響する複雑なものであるがゆえに、それらをして出来るだけ単純化することで料理の難易度を下げ、その日に適した料理を作っていくことで小さな満足感を得て、さらには人生の糧を得ることが出来る。

問八 この文章を読んだ生徒の意見の中で、本文の内容をふまえたものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A——今の時代では、料理の上手さが親の愛情の深さを示す証拠にもなるけれど、料理をしない人もいるから、料理とちよūdい距離感を保つことが大切だとわかった。

イ 生徒B——料理をすることは、ただ生きるために必要なものだけを作ることじゃなくて、料理に向き合っている人の気持ちの浮き沈みをはかるうえで目安にもなるんだね。

ウ 生徒C——女性が料理をすべきという価値観はもう古くなったから、たとえ料理が苦手でも、男女関係なくみんな料理を作れるようにならないといけないと思いました。

エ 生徒D——自尊心を高めるために一番大切なのは自分自身を認めることだから、他の人の意見はできるだけ聞かないで、自分のやりたいことを追求することが大切なんだね。

問九 自分の趣味や興味がある分野を通じて「自尊心」が高まる、という具体例を、本文の主旨に沿うように挙げなさい。なお、自分の体験を書いても構いません。

四

言葉の意味や使い方に関する後の問いに答えなさい。

問一 [1]・[2]に当てはまる言葉をそれぞれ答えなさい。ひらがなでもかまいません。

[1] 封じをする。

(秘密をもらさないようにする。)

[2] を長くする。

(待ちこがれる。大切なことを楽しみに待つ。)

問二 [3] [5]に当てはまるカタカナ語をそれぞれ答えなさい。

カタカナで書くこと。

[3] (2字) ー ト (補助。支援。)

キャ [4] (2字) (経歴や経験。職業。)

[5] (3字) ン ツ (中身。価値ある情報。)

受験番号	

氏名

氏名	

得点

得点	

①

きこう

㊦

ちんざん

㊧

そうてい

㊨

りよういき

㊩

ざっしん

②

問一 a

b

問二

問三

問四

③

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

④

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問一〇

問一一

問一二

問一三

問一四

問一五

問一六

問一七

問一八

